

Biography

広光は 1989 年に富山県富山市で生まれる。実家は 50 年続く新聞販売店。活字と大量の印刷物に囲まれた環境で育った。

高校卒業後、長野県松本市に移住。信州大学人文学部で美術史家の金井直氏から近現代美術について、認知心理学者の菊池聡氏から写真について薫陶を受け進路を改める。写真におけるアナログからデジタルへの変革、そしてソーシャルネットワークサービスなどのプラットフォームの拡大により、ビジュアル表現の社会への発信が容易になったことが彼の背中を後押しする形で、20 歳で信州大学を中退し、愛知県立芸術大学美術学部デザイン工芸科に再入学。専門性の高いグラフィックデザイン、映像、彫刻、建築、ランドスケープを横断的に学び、写真を自身の表現の核として育んだ。

写真家ホンマタカシ氏とワークショップで出会い 1 年間に渡り写真を講評して貰ったことを機に、彼の視点、写真表現に触れたことで、自身も芸術表現としてだけではなく、職業としてプロのフォトグラファーになることを決意、そして上京。2015 年に amana に入社、2019 年からフォトグラファーとして活動中である。広光にとって写真とは、機動性が高く時代にあったアウトプットのスピード感を持ち、また自己完結型でありながら他の多くの多彩なクリエイターと、自由に表現の幅を拡大できるツールであり、自身を最も表現できる手段だと感じている。

広光はストリートスナップを軸に、路傍の花、都市、人物などの様々な被写体を通して、彼が独自に培ってきた価値観、視点を元に、現代の日本における様々なテーマを扱い作品を制作している。彼にとっての美しさとは、日本の美意識に通じる仏教的な無常観を元にしており、刻一刻と移ろう時の中にほとぼしる生命の力強さとその破壊のイメージを対比することで生まれる一種の詠嘆的な儚さである。その表現手法として、アナログとデジタルの技術や機材を往還させ、撮影と編集を繰り返していくスタイルを作り上げ、一枚一枚被写体と問答を繰り返すように制作をしている。ある種実験的にもみえる新たな写真表現の可能性、美しさを追求することに生きがいを感じている。パーソナルプロジェクトでは『OVEREXPOSE』で NONIO ART WAVE AWARD 2019 石井孝之選 審査員特別賞を受賞、『Melting Flowers』シリーズで第 13 回 グラフィック 『1_WALL』入選、『MONOPRINT』シリーズで第 21 回 グラフィック 『1_WALL』に入選した。

休日はもっぱら一人で、そして友人達とキャンプに行くことが多い。ロケーションや移動手段に合わせて変わる装備を楽しむ。すべてを持っていかなくても現地で収集した枝や石を使って、自由に創造できる。友人達と集う時は各々で装備を揃え、お互いがそれぞれの装備を完結させた形でテントを近くに設営し、焚き火だけを一緒に囲い、共に自由な発想を掛け合わせる。四季折々の自然の美しさを共有する中で、雲の移り変わり、太陽高度、気温、湿度、一瞬たりとも同じ時が無いことに改めて気づく。そして何より、家族や友人達とお酒を嗜みながら、過ごす時間の大切さを感じている。